

「底が突き抜けた」時代の歩き方 338

北朝鮮という国の実態とされていること

詩人で北朝鮮・元山市生まれの金時鐘が今回の「拉致問題」に触れて、「やはり理屈の通る国ではなかった。日朝首脳会談が平壤で開かれて、はや旬^{じゅんじつ}日を経るが、胸のつかえはますます重くなるばかりだ。」と暗澹の表情を押しだしていた。また、「いかに無法な国とはいえ、13歳そこらの隣国の少女までさらっていったとすれば、「無謀も非情も極まった国家暴力といわねばならない。このような冷酷な事実を認めようとしなかった自分のありきたりの常識に、私はいま首ももたげられないほど、自己嫌悪に陥っている。」と、『産経新聞』（02・10・3）の中で自分を厳しく責めていた。金さんと同様に、多くの在日朝鮮人（や在日韓国人）の人々も「日本人拉致事件」にはかつてない大きな衝撃を受けたにちがいない。そのわずか二年前の、歴史的と評価され、その功績によって韓国の金大中大統領がノーベル平和賞を受賞することになった南北首脳会談を両手を挙げて大喜びし、そこで署名された「南北共同宣言」に心を震わせていた金さんの姿が大昔のように感じられる。

金さんは『世界』（00・8）に、次のように感動を表現していたのだ。

「正真、金正日総書記の闊達な映像にはおどろかされた。私ならずとも大多数の人が、金総書記の飾らない人柄像に予想外の親しみを覚えたにちがいない。目立たなく長幼の礼をつくしていた礼節のつつましやかさと合わさって、韓国内にも共感の輪は熱く広がっているとも聞く。金正日総書記のテレビ登場によって、情報が開かれていることがいかに大事で、人を近づけ、つないでいくかを逆に知らされたのは、彼にも同族の私にも本当に幸いだった。正直に申し上げて、朝鮮籍のままの私にも金正日氏はけっして近い存在ではなかった。むしろ生理反発すら覚える、王朝風の暗い権力者でさえあった。金正日総書記の平素の情報が余りにも乏しいからでもあるが、ありていには中世でもあるまいに、国家権力を世襲で受継いでいることへの、同族としての恥ずかしさが拒否感となって居坐っているからであった。その彼を絶対的指導者と仰ぐ国家体制はなおさら、私には社会主義とはおそろしく無縁の強権体制の国家だった。それに帰国者（在日からの）の縁故者や家族たちから伝え聞く、北共和国の不自由さや貧しさは、栄養過多気味の容姿にさえ嫌悪をつのらせた。

この度しがたい反感の固まりの私が、あろうことか、金総書記自からが金大中大統領を順安空港に出迎えたときから、南北共同宣言が発せられる6月15日までの三日間、すっかり泣き面相の笑い上戸^{アツン}に変わっていた。こうして泣いて、笑って、私はそうして正気に返った。両手できりみ合っている両首脳の手こそ、半世紀の時空をはらんで

分断のクレバスを越えた南北の意志なのだ。同族相残の惨劇はその手のみが防げるのであり、民族の和合も積年の不信も、北側の受けとめる手がなければ、すべてが徒勞の対立のみだ。そのいずれかの英知を秘めて、好もうと好むまいと金正日総書記はそこにそうして存在していた。(中略)

両首脳はもはや、南北いずれかの片方だけの権威ではない。だからこそ金正日総書記が、その気さくさと平安道訛りの素朴さで、全世界から好まれ、とりわけ南の、かけ離れていた同胞たちから好かれているのがたまらなく嬉しいのだ。私は芯から見直さねばならない。その体制をではない。ましてやその仕組みの頑迷さをではない。愛されていない金正日の、存在することの大きさを心して見直さなければならない。」

金さんの双方の文章をここに比較するかのように持ち出したのは、けっしてその落差をあげつらうためではない。あのときはこういい、このときはこういう、その時々的心情をあられもなくぶちまけているだけではないか、と辛辣に指摘したいからでもない。

「南北共同宣言」では涙を流して喜び、「日本人拉致事件」では涙を流して断腸の思いに駆られている金さんの純朴ともいえる姿に、祖国への郷愁を募らせている在日の人たちの遠くの幻を追っている日々の姿が重なるのである。確かに金さんの喜びようや悲しみようには多くの庶民がそうであるように、あまりにも無防備でこれほど手放していいのかといった疑問が率直に湧き上がってくる。

「私は芯から見直さねばならない。その体制をではない。ましてやその仕組みの頑迷さをではない。愛されていない金正日の、存在することの大きさを心して見直さなければならない。」と書いているところなどは、特にそうである。金さん(たち)が本当に「芯から見直さねばならない」のは、「その体制」や「その仕組みの頑迷さ」であって、テレビ映像向けに過剰に演出された「金正日の、存在することの大きさ」などではないからだ。もちろん、こう記すことはたぶんに後知恵であることは心得ている。世紀的な南北会談とマスコミに持ち上げられ、当事国双方の国民の熱狂的な興奮の渦中に少しでも接すれば、金さんのように手放しで有頂天になってしまうのも無理からぬことであるからだ。

しかし、誰もが浮かれている中で、国民の飢餓よりも「権力維持」を最優先とする金正日独裁体制の些かの揺らぎなさに目を向けていた人たちも少なからずいたということも事実なのである。だからといって歴史的な波風に一喜一憂し、翻弄されつづける金さんのような人たちにもっと歴史の表層を穿つ目を培ってほしいと望むよりも、祖国に関することであれば、手もなくイカれてしまう在日の人たちの望郷の念の強さというか、自分の生まれ育った郷土と記憶のなかだけでも一瞬も途切れたくないという願う心情の深さ(わだかま)というか、祖国(という観念)から一度も切り離されることなく、日本人としてのなんの蟠りも抱かずに日々を過ごしている我々日本人には想像しがたい、存在の根にかかわる擦れの痛切さを少しだけ垣間見た思いに駆られるのだ。

「南北共同宣言」に心の底から喜びに打ち震えた金さんは、「首脳会談が始まる同じ日、

軍事境界の地雷原の上を飛んでいる鶴の群れの写真を見た。ちか寄れない所での巣造りでなく、ちか寄っても危なくない、安全なところで見守ってあげられる、そんな鶴たちのゆうゆうとした飛翔を見たいと思った。」という感想でこの文章を終えている。「軍事境界の地雷原の上を」鶴たちはゆうゆうと飛んでいるのに、自分たち南北の人々はどうして境界線をゆうゆうと跨ぎ越すことができないのか、という思いがそこには溢れている。本来一つである筈の地域が無理矢理引き裂かれてしまった痛切さが積み重なって、南の北への想いも、北の南への想いも、そして日本列島に強制連行されてきた朝鮮の人たちの北への想いも、切々たる恋情にまで昇華されているのかもしれない。我々日本人にわからないのはその恋情であろう。その恋情の深さ故に、在日の人たちの北を見る目付きはいつも大きく潤んでいるのかもしれない。

言葉でなにかを書いていくとき、自分には「わかる」と思って書く方法と、自分には「遂にわからない」かもしれないと思って書く方法の二通りがあるような気がする。金さんであれ、今回の拉致被害者であれ、自分には「遂にわからない」かもしれないという気持が強くなっている。しかし、「わかる」だろうから書くのではなく、「遂にわからない」かもしれないけれども書こうとするスタンスも同時に強くなっている。「わかる」ためにも人は書くのだろうけれども、「遂にわからない」ということがわかるためにも人は考え、書かなくてはならないのではないだろうか。そして「わかる」ことは大切であるが、「わからない」ことがわかるということは、人にとってもっと大切なことではないかという気がしている。

さて、金さん（たち）が恋情を寄せずにはいらなくなっている北朝鮮がいまどういう実態にあるのか、今回 おおよげ 公にされた「日本人拉致事件」からでも北朝鮮の実態は明らかになっている。それは、隣国民の拉致は自国民の拉致を浮き彫りにしており、自国民の拉致がなくなれば隣国民の拉致もなくなるということである。だから、「日本人拉致事件」は自国民拉致事件にまで貫かれなければ、真の解決にはならないといえる。では北朝鮮の国民はどのようにして北朝鮮に拉致されているのか、その実態をいくらかなりとも知る必要があるだろう。実態については、なんといっても脱北者の証言に勝るものはないと考えられる。

現在、関西大学助教授で91年に平壤の朝鮮社会科学院に留学し、帰国後93年に「救え！ 北朝鮮の民衆・緊急行動ネットワーク（略称＝RENK）」を結成した李英和が『SAPIO』（00・10・11）で、99年4月に強制送還され、00年7月に中国へ再脱出してきた北朝鮮難民の証言ビデオと、北朝鮮国内の反体制グループに属する難民の手になる国内事情の報告書を入手し、それらに基づいて、00年6月の南北首脳会談で取り繕われた《「和解や平和」という言葉とは程遠い。麻薬の製造・密売、支援食糧の横領・流用、そして難民の虐待と処刑……》といった実態を暴き出している。たとえば、世界各国からの援助食糧が一般国民に配布されず、大半がヤミ市場に消えるその実態と仕組みについて、農民の手記はこう語る。

「世界各国と国際機関から送られた食糧はどう処分されているか。平壤市民には一人当たり 20 日分程度が供給されている。炭鉱・鉱山・鋼鉄部門には 25 日分程度が供給されている。軍隊、国家保衛部（秘密警察）、社会安全部（一般警察）、党職員には優先供給されている。残りは外貨稼ぎの機関企業所（政府・軍関連企業）に分配され、ヤミ価格で市場に売られる。それで得た資金のうち、80 %を国家が受け取り、流通資金として使っている」

《援助食糧は国家機関が運営する配給所には流れない。配給所で貰えるのは、せいぜい一か月に 5 日分の国産食糧だけ。中国産・日本産・米国産の援助食糧は、外貨稼ぎの機関が外国から買い入れたかのように装い、高値でヤミ市場に売り飛ばす。その資金が金正日と朝鮮労働党の懐に流れ込む。》だが、この程度の詐術なら序の口で、援助食糧が国家ぐるみでの麻薬密売の強力な武器となっているという。

「最近数年間、各道・市・郡・機関企業所に対し、食糧を自分で購入して配給するよう、〔朝鮮〕労働党が指示したのは周知の事実である。〔中略〕そこで、各道・市・郡・機関企業所はアヘンを植え、それで食糧を買うようになった。アヘンを収穫して当該の製薬工場に持っていけば外貨確認証を切ってくれる。それを当該機関に持って行き、食糧を積み込んで配給する。〔略〕世界各国から入ってくる食糧援助もアヘンを植えて計画を超過達成したものに、その超過分に依じて供給してやっている」（前出の報告書）

《こんな仕組みのせいで北朝鮮のアヘン栽培は近年ますます盛んになっている。ある難民（脱走兵）の話では、咸境北道の協同農場では今年、トウモロコシ畑を 3 割減らし、かわりにアヘンを植えているという。

麻薬増産のせいで食糧が減産となる。その不足分を人道援助が補填してやっていることになる。北朝鮮政府は今年も異常気象による食糧減産を訴え、麻薬王＝金正日は厚顔無恥にも国際社会に支援を求めている。》

援助食糧や麻薬密売だけでなく、難民処罰も過酷になっている。布教が及ぼす影響を恐れて、中国から強制送還された北朝鮮難民のうち、「中国でキリスト教会から援助を受けたことのある者」の処刑や、中国人（中国当局）との密通を恐れて、「中国で妊娠した女性」の処刑が「指示」されている。《北朝鮮は、国連児童基金（ユニセフ）や世界保健機関などから、乳児用のミルクや妊婦向けの医療機器と医薬品の援助を受けている》にもかかわらず、だ。難民問題をめぐっては江沢民と金正日の中朝会談で、次のように話し合われた。

《難民の増加、とくに数百名にのぼるとされる脱走兵に危機感を抱いた金正日は、江沢民に協力を要請した。江沢民は同問題で高まる国際的批判に神経をとがらせ、逮捕・強制送還の強化を約束した。だが、その際に江沢民は金正日に注文を付けた。「むやみに難民を処刑するな」という条件である。北朝鮮当局が虐待・処刑するから、難民が自主的に帰還しない、というのが中国側の基本認識であった。

これに依って金正日は「難民虐待」を緩和する新たな指示を打ち出した。だが「むやみに殺さない」といっても、強制送還が 2 度目までの難民についてのことである。3 度

目の者は容赦なく強制収容所に送り、キリスト教徒の嫌疑をかけられた者や妊婦は処刑される。2 度目でも、拘置所や刑務所での拷問と虐待で「勝手に死ぬ者」は別問題である。》

証言ビデオによると、《5 か月近くに及ぶ拘置所と刑務所暮らしで、6 畳ほどの監房に詰め込まれた30～50名の難民のうち4名が死亡した。重労働を連日強制され、給食は手のひらほどのトウモロコシ飯と塩少々をビニール袋に入れてもらう。警察での取り調べでは、正座のまま斧の柄で殴打され、1日3時間も後ろ手に手錠を掛けられて蹴られた。尋問内容は「キリスト教会で助けてもらったことを白状しろ」というものであった。男性の歯はほとんど折れ、肋骨が折れたまま重労働に駆り立てられた。生きて釈放されても住む家もなく、再び中国へ脱出するしか、農民の生きる術はない。こうして3度逮捕されると「三振アウト」。収容所送りか、処刑される。》

「以前は国民に恐怖心を植えつけるため、数千名の住民を集めて銃殺した。だが、このことが海外に露見し、世界の世論が騒がしくなるや、2000年に入って新たな方法で処刑している。脱北者〔難民のこと〕が韓国安全部〔＝国家情報院〕や宗教団体の派遣者から話を聞いた場合、秘密裏に地下監房で容赦なく銃殺している」(前出報告書)

中国から戻った難民がもたらす外部情報によって、「韓国よりも数段劣る中国でも、白いコメを食べ、豚肉を食べている。生きているあいだに一度は韓国で暮らしてみたい」という会話が国民の間で普通に交わされるようになり、「ほんとうに南北交流を始めたら、北朝鮮の住民は全員が南に殺到するだろう」とある脱走兵は断言する。先述したように、北朝鮮当局は各種の宗教活動の流入を恐れており、報告書はこう記す。「各宗教団体から、宣伝書・肖像画をはじめ宗教関連の書物が北朝鮮に入ってきている。これに対して北朝鮮当局者は住民に取り締まりを加え、家宅搜索など様々な方法で監視・統制している。当局者は疑わしい者を殴って尋問し、証拠が見つければ勝手に処刑している」

5 月の中朝首脳会談以降、中国では「難民狩り」の嵐が吹き荒れ、中国・吉林省の延辺朝鮮族自治州(延吉市)や、これまで安全地帯と目されてきた中国・黒龍江省でも続々と難民が逮捕されており、「脱北者を捕まえて自白調書を取り、労働党と首領様のために働くという誓約書を書かせる。その後、悪行を洗い流すつもりなら、もう1度中国に行って脱北者10名以上を摘発するよう任務を与えて派遣している」(前出報告書)。

金正日の指示によるこの逮捕「旋風」によって、卑劣な密告制度が中国にまで拡大されているという。筆者を通じた告発は、次の光景を映しだして締め括っている。

《2 か月後に南北首脳会談を控えた4月18日、突然、中朝両国の中国側国境に歌声が響いた。「われらの願いは統一、夢も願いは統一……」。平壤で南北首脳が手を取り合って歌った『われらの願いは統一』である。だが、国境での歌声の主は、為政者ではなく、北朝鮮の難民たちであった。強制送還に抗議して決死の覚悟で暴動を起こしたのである。約80名の難民のうち、60名ほどは妊婦を含む女性と子供たちであった。

発砲許可を受けた武装警官隊が一斉突入する中、徒手空拳の難民たちはせめてもの抵抗に『われらの願いは統一』を絶叫した。惨事をいち早くキャッチして私が発信した第

一報は、A P 通信や A F P 通信が世界中に配信した。だが、暴動鎮圧の 2 日後、負傷者を除く難民全員が強制送還された。

いま私たちが耳を澄ませて聴くべきは、南北の為政者が「政治ショー」で張りあげる歌声ではない。テレビで流れることのない北朝鮮難民たちの悲痛な歌である。》

日本の食糧援助は 9 2 年から開始されているが、最近について記すと、9 5 年、50 万トンのコメ（村山政権）、9 6 年、国連を通して 600 万ドルの贈与、9 7 年、7 万トンのコメ、0 0 年 3 月、10 万トンのコメ、1 0 月、50 万トンのコメ、0 1 年 1 1 年末には北京で非公式の日朝実務者会議が開かれ、北朝鮮側がコメ支援を要請するが、日本側が断った（北京発共同）。以上のコメ支援の取引の背景に日本人妻の帰国問題や拉致問題があり、北朝鮮側のコメ支援の要請を日本側が断った直後に、北朝鮮は日本人行方不明者の調査の打ち切りを発表し、奄美大島沖での工作船によるミサイル発射事件も起きている。コメ援助について、9 9 年 5 月と 6 月にそれぞれ中国経由で亡命した孫英沢（2 9）と李大漢（3 8）が『週刊文春』（0 0・1 1・3 0）誌上で、こう口を揃えている。

孫「日本の援助？ 聞いたことがない。『金正日將軍の思し召し』という配給はあったが……信じられない」

李「北では誰も知りません。『敵国』からの援助があったなんて夢にも思いませんでした。コメの配給はありましたが、軍の幹部は『金正日將軍が資産を崩して買ったコメだ』と説明していましたし、配給があるのは軍だけで、一般家庭には行きません。

金正日は北の人民を人質にして君臨している。党の子会社は金正日のためにマツタケや鉱物資源を海外に売る『忠誠外貨獲得』を熱心に進めていますが、あれだけ外貨を持っているならコメなんていくらでも買えるはず。それなのに口々に食べ物も与えずに飢え死にさせている。」

金大中大統領の「太陽政策」についても、

李「じつは 9 6 年の飢饉の際、人民の意識が大きく動揺した時期がありました。世間に不満が渦巻き、社会が変化する胎動を感じました。この時、金正日政府は本当に危機を迎えました。その金正日を救ったのは、まさにコメ支援。金大中は、金正日にコメをあげて助けた見返りにノーベル平和賞をもらったのです。

故郷の人々が飢え死にして行くのは本当に忍びない。北朝鮮がいま崩壊しても、2 0 年後に崩壊しても、混乱のレベルは同じでしょう。無条件の食糧援助に代表される金大中の『太陽政策』は金正日体制の崩壊を遅らせ、飢え死にする犠牲者を増やすだけ。」

孫「金大中は、北朝鮮には一般庶民と党関係者の二種類の人種がいることがわかっていない。まだ恵まれている党関係者しか見ずに政策を論じている。一般の人民は本当に苦しんでいるのです。金正日とは握手するのに、なぜ北の民衆とは握手しないのか。」

金正日体制の崩壊については、

李「同じ亡命者でも人によってはずいぶん考えが違いますが、『金正日が死ぬまで北朝鮮は絶対に変わらない』一点だけは同じ。」

李「北朝鮮の人民は、今でも本気で戦争を望んでいます。戦争に勝って楽をしようと洗脳されてしまったのです。」

北朝鮮を変えるには、方法はひとつしかない。それは、金正日が死ぬことです。金正日体制さえ覆れば、民衆の意識はいくらでも変わります。

(中略) 北の民衆が私と同じように韓国の実情を知ったら、金正日政権は絶対に崩壊します。しかし金大中のお陰で、金正日は最大の危機を乗り越えてしまった。」

日本の食糧援助を問われて、孫「単なる食糧支援をやっても意味がない。飢餓に苦しむ民衆には絶対に届かないのですから。それより農地改良技術を支援して、下から飢餓をなくす努力をしたほうが、はるかに貢献するでしょう。本当に困っている人々にコメが行くよう道を開いてください。このままでは金正日がぬくぬくと太るだけです。」と語っているが、『論座』(02・10)で在日韓国人三世の大阪市大教授朴一パクイルと対談している韓国対外経済政策研究院研究委員の趙明哲チョミョンチョルは、「北朝鮮が食糧を自給できないシステムになってしまっている」と指摘する。「現在のような集団農業の形態では、どうしても食糧難を解決」できず、「農業の私有化もしくは家族単位での請負制を認めるしかない」と説いて、こう述べる。

「食糧の配給では、質・量ともに平壤市が最優先されています。たとえば、地方では米と雑穀の比率が三対七だとすると、平壤市は七対三といった状況なのです。北朝鮮当局は、平壤は首都であり、外国人も多いといったさまざまな理由をつけて配分の偏りを正当化しようとしています。外国から見れば異常な状態としか言いようがありません。」

さらに大きな問題は、食糧の輸送のためのインフラがないことです。これは政策というより現実の問題なのですが、平壤をはじめとする大都市は比較的インフラが整っているので、食糧を輸送することも容易です。しかし、北朝鮮の大部分では、鉄道は電気がないため動かず、自動車もガソリンがないので使えません。ある地方で深刻な食糧難が起きたとしても、そこへ食糧を運ぶことができない。」

したがって、「送った食糧がエリート階層に独占されてしまうという心配は杞憂でしょう。そもそもエリート階層は、国内で生産される食糧を優先的に割り当てられていますから、外国からの食糧に頼る必要はありません。問題は、たとえ外国から食糧が送られてきても、現在の北朝鮮では、必要としている地域や人々に届けるのが困難だということなのです。」

現在も食糧難は非常に深刻です。配給されている食糧の水準は、標準的なカロリー摂取量の30～40%にすぎず、特に農業ができない山間地域では、必要とするカロリーの30%以下の食糧しか配給することができない状態です。北朝鮮の人たちを救うためには、諸外国がもっと多くの食糧を援助する必要があります。しかしそれと同時に、送った食糧を困窮している人たちに届ける方法を考えなくてはなりません。」

59年、北朝鮮政府高官の子として平壤に生まれ、87年、金日成総合大学経済学部教授となり、92年から中国・天津の南開大学客員教授を兼ね、94年に韓国に亡命し

た超エリートの趙氏は自分の亡命理由をこう説明する。

「北朝鮮社会の最高位層で暮らしていた当時から、私はさまざまな葛藤を感じていました。やがて国外へ出かけるようになると、その葛藤はさらに深まっていきました。国外出張に出かけて外国を見るたびに、北朝鮮の体制や上層部の姿勢が現実から乖離していると感じずにはいられなかった。北朝鮮をそのような状況に追い込んだすべての責任は指導部にある、世界がどのように変化しているかを指導部は知らなくてはならないと思いました。」

しかし、国内にいては指導部の考えを改めさせることはできません。指導部に近い私が韓国に行けば、彼らの目を覚まさせることができるのではないか。そんな考えもあった、韓国行きを決めたのです。」

脱北者問題についても、「根本的な問題は食糧難」であるよりも、「人権の問題、生存権の問題、そして処罰の問題」が背景にあると語る。「まず人権についていえば、北朝鮮の憲法では思想・信仰・集会・結社の自由が認められていますが、実際にはこうした自由はまったくありません。国民が国家の政策を間違いだと批判したり、修正を要求することはまったくできず、ただ当局の指示が無条件に執行されるだけなのです。国民はたがいに監視しあい、密告しあわなければならない。国民生活の隅々までこうしたことが行われており、国民は自分の意思で生活できない状況にまで追い込まれています。」

次は生存権の問題です。世界のどこに住んでいる人も、自分の幸福を追求する権利を持っているはずですが、北朝鮮のような食糧難が起きたら、自分自身でそれを解決する方法を探すでしょう。しかし、北朝鮮では、国家の集団農場で生活ができなくても、個人で農産物をつくることは認められません。国外に親戚がいても、頼ることさえ許されない。北朝鮮では、個人が幸福を追求する権利、生存のための方法を探す権利さえもまったく認められていないのです。餓死者が次々に出ているなかで、こうした問題はきわめて切実なものです。

さらに処罰の問題があります。これは人権、生存権と直接つながってくる問題ですが、脱北者たちがみな食糧難のために国を出たとすれば、十分な食糧と衣類を与えられれば、みな祖国に帰るはずですが、しかし、誰も戻ろうとはしない。脱北者が帰国すれば、本人だけでなく、家族、親戚まで厳しく処罰されるからです。」

趙氏は専門家らしく、北の「改革・開放」についても、「これまで北朝鮮が行ってきた中央集権的な管理システム、計画経済、自立的経済の建設という目標、バーター貿易といったもの」が「北朝鮮の経済政策を縛って」おり、「外国からの投資を受けること」を困難にしていることや、供給が需要についていけないために人々はカネがあってもモノがないから買えず、大量のコメが流れていくことによって高騰する「ヤミ市場と国営商店の価格を同じにしたければ、価格の自由化、企業の自由化、貿易の自由化を同時に行い、「国営企業と商店が自由に販売価格を決定できるようにする必要がある」と主張する。

彼の主張で最も耳を傾ける必要があると思われるのは、金大中大統領の太陽政策につ

いての「問題は、包容政策が正しいか正しくないかではなく、包容政策のもとで、どうすれば北朝鮮を変えることができるのかという方法論の部分にある」という方向性であり、「拉致というのは非人道的な行為です。しかし、拉致問題を解決するために、人道支援を凍結するのも、同じように非人道的な行為でしょう。日本や韓国が北朝鮮よりも優れているのは、より人道的な国家であるという点であるはずです。他に交渉のカードはいくらでもあるのに、なぜ餓死していく人たちへの援助を止めるというカードを使わなければならないのでしょうか。」という彼の主張に応用していくなら、「人道支援を凍結する」のではなく、北朝鮮を変えていく方向での人道支援の継続が図られる必要があるということだ。

以上の北朝鮮をみると、金日成が打ち出した「主体」思想のどこに国民一人一人の「主体」がみられるのか、強烈な皮肉が感じられる。もっとも金父子による独裁者としての「主体」のみが自由自在に発揮されているのだらうという感想を呟きながら、エッセイストの米原万里が『週刊文春』（02・10・24）の「私の読書日記」で、ノルベルト・フォラツェン『北朝鮮を知りすぎた医者』（草思社）と李在根『北朝鮮に拉致された男』（河出書房新社）について簡潔に要約しており、北朝鮮の実態を知る一助となるので最後に抜粋しておく。

前者は、《おそらく初めて北朝鮮の最底辺を広く詳細に観察する機会を持ち、同時に現地の人々と人間的な交流を経験することのできた西側の人間による日記である。

著者はドイツのNGO医療支援組織カップ・アナムーアの医師として、1999年7月から18か月間北朝鮮に滞在した。海州の病院で全身火傷をおった患者に皮膚移植することになり、著者も皮膚を提供する。これが北朝鮮のマスコミに取り上げられるや、一躍英雄となり「友好メダル」を授けられる。勲章を見せると、ふつう外国人が絶対行けない区域にも通されるようになる。おかげで北朝鮮の各地各施設を見て回り、各階層の人々と接する。街に出れば取り囲まれ、即席の診察を行う。

こうして北朝鮮全土を覆う極端な物不足、飢饉、病気の蔓延と遅れた医療技術の実態をつぶさに知る。手術は麻酔無しに素手でカミソリで行われ、水と電気が止まっているため消毒もできない。栄養失調の子供たちが誤診されて、抗生物質を投与され続けたりしている。

悲惨な一般国民の生活とは雲泥の差の特権層の生活をかいま見る機会もある。軍や特権階級の病院は、MRIはじめ最新の設備が整っている。高官や軍人が車を飛ばし、平気でひき逃げする。平壤の記念式典ではコカ・コーラを飲み、アディダスやナイキのスニーカーをはき、アルマーニのジーンズに身を包む若者たちと出会う。著者をクリスマスディナーに招待してくれた女子学生（高位の將軍の娘）の部屋には、マドンナのポスターや「タイタニック」のビデオがある。金親子の肖像が無いので尋ねると、「だって、あの人たちのこと、好きじゃないんですもの」とさざりと言い放つ。

西側から派遣された援助団体の人間たちの生態もおぞましい。朝鮮人を見下して

一般住民とは一切接触せず、ましてや地方に足を運ぶこともなく、ただただ平壤の隔離された外交官地区のオフィスでお気楽なミーティングと本国への報告書作りに明け暮れている。

診療活動が続ける内に、著者は若い入院患者に多い心身症に注目する。その原因は「人生にたいする大きな不満……病歴を見ればわかる。将来の夢や考え、理想、夢、希望、目的などが全然ないのだ」。また、孤児院と孤児の異常な多さにも疑問を持ち始める。ひき逃げされた兵士の遺体に無数の拷問の痕を確認する。こうして強制収容所の存在を意識するようになり、「この国の人たちの大半が冒されている病は、凄まじい恐怖です。残忍きわまりない弾圧によって国民を支配下におこうとするスターリン主義の恐怖政治における恐怖。このために国民は病気になっているのです」という所見に達した頃、著者は国外退去処分を受ける。唯一の救いは、著者が感嘆を禁じ得ない北朝鮮の優しさ、善良さである。》

後者の《著者李在根^{イジエグン}は、1970年、漁船で航行中に拉致されて、1998年に決死の越境を果たすまで、北朝鮮で過ごした人だ。拉致された経緯、北朝鮮での生活、脱出から帰国までの経験を生き生きと綴る。

同時に拉致された船員たちの大多数は韓国に帰されたが、彼は有能と見込まれて中央党政治学校に入学させられ、工作人員になるための過酷な訓練を受ける。適性無しと見なされたのか、地方の工場勤めとなり、中国東北部出身の女性と結婚。党員にまでなっているのは、北の体制に順応せざるを得なかったのか。90年代の食糧危機以前には自宅を取得したり、家電製品を買うなど一応安定した生活を送っている。

唾然とするのは、党官僚や地方官僚、警察、軍など生産に従事しない国民監視管理機関の人口が異常に多いこと。しかも彼らは腐りきっていて、威張りくさっていて、何をするにも彼らの許可が必要で、そのたびに賄賂を要求する。

さらに、やれ革命記念日だ、首領の誕生日だ、と労働に疲れ飢えに苦しむ国民は派手なパレードに頻繁に動員される。金日成死亡の際は、「党の幹部たちは、人々にもっと泣けとうるさく強制したが、涙なんて無理に流せるものではないだろう」。

国民に最貧の生活を強いながら、外国に対して政府は、それを懸命に隠すための大がかりなショーをやる。97年9月、国連食糧農業機関から視察団が来たおりは、訪問先の従業員は何日も掃除をさせられ、当日は帳簿への署名と引き替えに食料を受け取る。視察団が帰ってしまった午後5時頃、従業員は自宅に運び込んだ食料を一斉に返却する。ユニセフによる視察の際は、幼稚園の児童にお菓子が配られ、視察終了後回収される。

老年に達した著者が、ついに家族とともに越境をはたし、中国経由で母なる韓国へたどり着くまでの艱難辛苦はサスペンスに満ちた冒険小説を読むようである。中国で身を寄せた妻の兄が公安に密告したり、韓国領事館には何度も門前払いを食らわれたり。韓国のマスコミが取り上げてくれたとたんに領事館の対応が掌を返すように豹変する場面には既視感を覚える。》

2002年11月5日記